

〈キリスト教研究所7月一泊研究会 発表要旨〉

キリスト教概説の多様化について

橋本 茂

学長のクリスチャン・コードの撤廃運動の次は、各学部のカリキュラムの再編成と連動した「キリスト教専門科目」や「キリスト教概説」の選択科目化であろう。これにどう対処するかが、我々クリスチャン教師の課題であろう。キリスト教関連科目の必修をキリスト教主義が保持されているかどうかの重要な指標と考えるなら、これらの科目の必修は守るべきとい

うことになるだろう。しかし、ここでは必修か選択かという問題に直接関わる前に、日頃、一人のクリスチャンとして「キリスト教概説」について考えていることを述べてみたい。

- (1) 現在専任の教師は7名いるが、そのうち6人は神学、宗教学、哲学の出身である。また、多くの非常勤講師も同じような出身の方々である。もちろん、学生に、聖書を中心としたキリスト教理解を得させるという教育方針からそのような人選がなされていると思う。
- (2) しかし、学生のキリスト教理解への道は多くあっていいのではないか。キリスト教は長い歴史を通して、その信仰の果実としての多くの諸文化を残してきた。そうした文化への理解を通して、キリスト教理解へと向かう方法があるのではなかろうか。私自身が一人のキリスト者の小説を通してキリスト教の信仰を得たものであるから、特にそう感じるのかも知れない。
- (3) 従って、キリスト教概説という科目のなかに、例えば、次のような講義があってもいいのではないか。

①キリスト教の歴史—特にキリスト教と日本—

この講義の担当者はクリスチャンで歴史学畑の出身者が望ましい。

②キリスト教と文学—西洋文学の場合と日本文学の場合—

対象としてドストエフスキーやトルストイ、また椎

名麟三や遠藤周作などを取り上げて文学と信仰について講義する。担当者は文学畑出身ということになる。

③キリスト教と音楽—宗教音楽—

バッハなどの音楽を取り上げ、時にはチャペルのパイプオルガンなどを使用して授業する。もちろん担当者は音楽畑の出身ということになる。

④キリスト教と絵画

⑤キリスト教と社会事業

⑥聖書の歴史

⑦聖書と人間 等々

ということは、キリスト教関連科目の担当者はもっと多様な畑の出身者によって構成されているのではないかという主張にもなる。

(4) 現在の授業でもこれらのテーマは断片的には取り上げられていると思う。しかし、ここでは、そのテーマを年間を通して講義することになる。

(5) このような内容の講義を専任教授、非常勤講師によって学生に提供する。学生はこれらの講義の中から最低一つを選択必修として選択する。

以上が日頃考えていたことをあまり整理しないままに書いたものである。もちろん、キリスト教関連科目担当の先生方によって、これと似た案が出されているようであるので、私の案も大きくは間違っていないものと安心している。ただ、私の提案は、キリスト教への理解への道を多様化し、その選択

を学生に任せた点にあると思う。

(はしもと しげる

所員、社会学部長)